

## 可能性，生命活動と基本的請求力\*

松井 範 惇

### 要 旨

本稿は、アマーティア・センが提唱してきた、Capability：ケイパビリティ、Functionings：ファンクショニング、そしてEntitlement：エンタイトルメント、という3つの概念・分析道具に暫定的ではあるがより適切な日本語を与え、それらの関係性を議論する。そうすることによって、センの理論体系のより深い、体系的な理解を進めることに資する。

日本では、近年になってようやくセンの業績が評価され始めてきている。しかし、“Capability（ケイパビリティ）”を「潜在能力」と呼び、“Functionings（ファンクショニング）”を「機能」と日本語訳しているのは、センの議論の本質を歪める結果になってしまっている。さらに、貧困と飢餓・飢饉の議論において、“Entitlements（エンタイトルメント）”に対して「権原」という日本語が与えられている状況は、センの真の意図を表さない、極めて狭い概念におとしめてしまうことになっている。少なくとも、読者には議論の中心点が、そして論争の問題点がぼけてしまう結果になっている、といわざるを得ない。これらはどれも十分満足すべき言葉の使い方、用語法になっていない。

センは、‘Well-being’（豊かであること、暮らしぶりがうまくいっていること）を追求する。人々が自由に、自分のしたいことが出来、なりたいものになり、行きたいところに行ける、栄養が足りており、自分の住む、関係するコミュニティーで議論に加わり決定に参加する、そして他人の豊かさにも貢献する、そういった活動から自尊心を得る、子供の食事も十分に教育を与えることもできる、そのような状態とそれらを達成する可能性に最大の価値を与える。これは、所得だけでは計れない、消費数量だけでも分からない。伝統的な経済学の「欲望充足 (needs fulfillment)」, 「効用 (utility)」,

---

\*本稿は、「可能性，生命活動と請求力：センの“開発”の体系的理解のために」（山口大学大学院東アジア研究科 Working Paper No. 02-02, 2002年10月）をもとに書き改めたものである。国際開発学会第13回全国大会（2002年11月30日-12月1日，上智大学）での研究発表（セッション名：人間開発をめぐる概念）で多くのコメントを頂いたことに感謝する。当然のことながら，本稿における誤り，誤解，不理解などはすべて筆者の責任である。

「満足感 (satisfaction)」だけで捉えることも不十分なことは明らかであろう。

これら3つの概念のセンによる定義と関係について論じ、不平等、貧困、飢餓、飢饉という開発における重要な問題へ、これらの概念が如何に使われるかについてふれる。それぞれの概念にまつわるこれまでの誤解や論争などについて考察する。

キーワード：可能性、生命活動、請求力、アマーティア・セン、Well-Being

### はじめに

1. センの定義：概観
2. 「潜在能力」、 「機能」 および 「権原」
3. より良い理解のために
  - 3-1. “エンタイトルメント” は、 「基本的請求力」
  - 3-2. “ファンクショニング” は、 「生命活動」
  - 3-3. “ケイパビリティ” は、 「可能性」
4. 要約と結論

### はじめに

「豊かさとは何か」を追求してきたアマーティア・センは、新古典派の主流派経済学における「効用 (utility)」と「厚生 (welfare)」に基づく経済学を徹底的に批判してきた。人々にとっての真の豊かさとは、お金が沢山あることだろうか (Rich)、それとも物をいっぱい持つことだろうか (Opulence)、あるいは、好きな物を好きなだけ消費することだろうか (Consumption)。資産 (Asset) をたくさん残すことだろうか。それとも、人生に諦めてしまっておくと、むしろ欲望や煩悩に惑わされず、少しの成功や喜びにも大きな満足 (Satisfaction) を得られること、が豊かさを生み出すのだろうか。

センは、‘Well-being’ (豊かであること、暮らしぶりがうまくいっていること) を追求する。人々が自由に、自分のしたいことができ、なりたいものになり、行きたいところに行ける、栄養が足りており、自分の住む、関係す

るコミュニティーで議論に加わり決定に参加する、そして他人の豊かさにも貢献する、そういった活動から自尊心を得る、子供の食事も十分に教育を与えることもできる、そのような状態とそれらを達成する可能性に最大の価値を与える。これは、所得だけでは測れない。消費数量だけでも分からない。伝統的な経済学の「欲望充足 (Desire-needs fulfillment)」, 「効用 (Utility)」, 「満足感 (Satisfaction)」だけで捉えることが不十分なことは明らかであろう。

日本では、近年になってようやくセンの業績が（その多面性も含めて）評価され始めてきている。しかしながら、“Capability (ケイパビリティ)”を「潜在能力」と呼び、“Functionings (ファンクショニング)”を「機能」と日本語訳しているのは、センの議論の本質を歪める結果になってしまっている。さらに、貧困と飢餓・飢饉の議論において、“Entitlements (エンタイトルメント)”に対しては「権原」という日本語が与えられている状況は、センの真の意図を表さない、極めて狭い概念におとしめてしまうことになっている。少なくとも、読者には議論の中心点が、そして論争の問題点がぼけてしまう結果になっている、と言わざるを得ない。これらはどれも十分満足すべき言葉の使い方、用語法になっていない。経済発展論、経済学方法論、集合的選択・合理主義的選択理論、社会的公正、資本・投資・成長と分配、食糧・貧困・飢餓・飢饉、性的差別と家族経済学、厚生経済学、そして、倫理学、民主主義の理論など、実に幅の広い分野で研究を進めてきたセンは、1988年から最近までいたハーバード大学では哲学教授と経済学教授（ラモン・ユニバーシティー・プロフェッサーとして）を兼ねていたことから分かるように、書き物、話すものの全てにおいて、極めて厳密に、しかも細心の注意を払って言葉を選択し、定義し、論理を展開してきた。

本稿は、センが提唱してきた、ケイパビリティ、ファンクショニング、そして、エンタイトルメント、の3つの概念・分析道具に暫定的ではあるがより適切な日本語を与え、それらの関係性を議論する。そうすることによって、センの“開発”に関する理論体系（それに賛同するか反論するかは別として）のより適切な理解を進めるための第一歩としたい。

カタカナ言葉の嫌いな筆者は、“ケイパビリティー”を「可能力」，“ファンクショニング”を「生命活動」，そして，“エンタイトルメント”を「基本的請求力」と，それぞれ日本語付けすることを提唱する。第1節で，センの定義を概観し，次の節では，これら3つの概念のセンによる定義と日本語訳との関係について論ずる。次の節では，貧困，豊かさ，飢餓・飢饉という開発における重要な問題へ，これらの概念が如何に使われるかについてふれる。それぞれの概念にまつわるこれまでの誤解や論争などについて簡単に考察する。

### 1. センの定義：概観

「ケイパビリティー (Capability)」がセンによって最初に提唱されたのは，1979年5月22日，スタンフォード大学でのタナー記念講義であった。これは，1980年に論文，“Equality of What?”として公刊されている。1982年の論文集，*Choice, Welfare and Measurement*，にも収められている。

「平等」・「不平等」を論じるに際しては，その基準，すなわち何についての平等・不平等であるかを明らかにしなければならない。所得，消費，資産，効用，保有資源，機会，達成度，自由度，権利などが考えられる。ベンサム以来の効用に基づく現代の古典派および新古典派の経済学では，もっぱら効用のみが採用されてきた。実証研究では所得が最も頻繁に参照されてきた。ロウルズ流の「公正の理論：差異原則」に基づくならば，「基本的財 (Primary goods)」すなわち，所得，富，機会，自己尊厳の社会的基礎などを含むもので測ることになる。ドゥオーキンによると，それは「資源」で測られるべきであり，ノズィック流の平等主義に基づくならば，「社会組織のための基本原則として要求されるべき自由の権利の拡大されたセットに対する平等なエンタイトルメント」で判断されるべきであるという。

功利主義，総効用主義，そしてロウルズの正義論による，全ての基準のどれも満足できるものではない，とセンはそれらを退ける。第1に，これらの

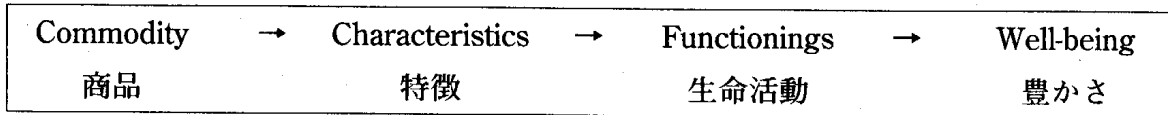
概念では、人間の基本的な多様性を認めることにならない。「効用」は、財・サービスなどの“モノ”によって何が出来るかを表すが、その測定は、“モノ”から生み出された心理的・精神的反応の結果を表しているにすぎない。人間の多様性、差異を認めるとき、「平等」を達成したいと願う人間の本性とどうかかわるのだろうか。平等が望ましいと考えられるいくつかの側面には、例えば、権利、達成、幸福などがあるだろう。反対に、人々の間で異なるものには、社会的環境、能力や技能、嗜好、そして価値体系がある。後者における違いが前者の全てを均等化することを排除するので、「多様性」と「平等」という2つの概念は正面から衝突すると考えられるのである。一例では、異なる技能とそれから導出される報酬の違いは、「平等」な権利という考え方とともに、不平等な物質的基盤に表れる。全てに平等をあてはめることは、多様性に目をつむることになる。

第2に、これらの基準はすべて、結末のみを重んじる結果主義に陥っている。行為や政策などの選択変数を判断するに際して、ものごとの状態を完全にその結果だけに基づいて行い、結果以外の情報を考慮しないという欠陥を持つ。第3に、センのいう厚生主義 (Welfarism) の弊害、すなわち、判断基準をそれぞれの状態から生じる関連する個人の効用という情報のみとする、欠点を持つ。これには2つの側面があり、効用という極めて貧しい情報を使うことであり、他方、効用以外の情報を避けるという側面がある。

第4には、新古典派の総効用主義では、状態の価値づけ・判断には、個人的効用の総和のみを問題にするという弱点がある。つまり、誰がいくら失い、誰が得をしたかを問うことなく、合計としての効用が高い状況に、社会的には高い順位づけをする、総和順位づけ方式なのである。

ロウルズの正義論における議論は、「基本的財 (Primary goods)」という概念を導入することによって、厚生主義の欠陥を超克してはいる。しかし、効率・平等を判断するのに、「基本的財」に対する個人の支配力のみを用いているので、厚生主義以外の上の非難点を免れてはいない。

センの議論の基本的な枠組みは、次のように示されよう：



まず、ある個人  $i$  の直面する商品ベクトルがあって、その個々の要素は、例えば、自転車、パン、家、本、などがある。それぞれの商品は、さまざまな特徴を持っている。例えば、自転車には、乗ってどこかへ行く、乗らずにカッコ良く見せびらかす、など。パンには、食べて栄養を摂取する、友人・家族との集まりに使うなど。家には、寒さをしのぐ、お客を招く、ものを置く、高価な鬼瓦を誇るなど。本には、新しいことを学ぶ、読むふりをして時間をつぶす、枕として使う、などであろう。人が利用し、活用するのは、その人が所有する商品そのものではなく、それらがもたらす特徴なのである。

それら諸特徴の組み合わせを使って、実際に達成する人々の “Doings & Beings” の集合を、センは “ファンクショニング” と呼ぶ。その人がなりたいたいもの、したいこと、の全ての集まりである。例えば、自転車でサイクリングに行く、食事をする、雨露をしのぐ、外国の事情を知り教養ある人になる、ことなどである。

商品の組み合わせは、個人  $i$  にとって手に入れられる範囲の中から選択することになる。それらは、その人の所得、直面する価格、その他、資産、親・家族、法律、年齢など多くのものに依存する。ある人  $i$  にとって、与えられた経済的、社会的、法律的条件のもとで、手に入れうるこの商品ベクトルの集合の全体を、センはエンタイトルメントと呼ぶ。働いて得るエンタイトルメント、病気になった時や失業した場合に得る約束としてのエンタイトルメント、親や他人からもらうエンタイトルメント、などさまざまなものがある。資産を単に所有しているだけでなく、その使用权や所有権を移転することによって手に入れるエンタイトルメントもある。

すなわち、

$$x_i \in X_i$$

人は商品ベクトル  $x_i$  を特徴  $c(x_i)$  に変換し、それをさらにファンクショニングに転換する関数を  $f_i(c(x_i))$  とする。すなわち、

$$f_i \in F_i,$$

そして、この  $F_i$  は現実的に可能な活用関数であって、個人  $i$  が現実的に、なりたい、達成したい、と思うことの集まりである。この  $F_i$  の全体像を、 $Q_i$  とし、これを、センは“ケイパビリティー”と呼んでいる。すなわち、

$$F_i \in Q_i$$

である。こうして、 $X_i$  は伝統的経済学では、消費者理論の予算制約式のよ  
うなものに対応するかもしれないが、はるかに広い概念であることが分かる。  
 $F_i$  はこうしてみると、個人  $i$  の可能性の中の、現実に可能な活用関数、つ  
まり、商品の諸特徴を生命活動に変換する“ファンクショニング”の全ての  
集まりである。

従って、センのいう“エンタイトルメント”  $X_i$  とは、「ある人が必要とする商品・サービスに対する支配力」、つまり、ある（一定の）法律・歴史・社会制度の下で、それぞれの人々に与えられ、認められた権利としての経済（生活）維持のための商品・サービスの入手可能性（金額で表した）のことである。

## 2. 「潜在能力」、 「機能」 および 「権原」

アマーティア・センの“ケイパビリティー”概念が、「潜在能力」として日本に初めて紹介されたのは、『福祉の経済学：財と潜在能力』（鈴木興太郎訳、岩波書店、1988年）においてであろう。原著のタイトルは、*Commodities*

*and Capabilities*, で1982年4月アムステルダム大学で行われたヘニップマン記念講義の草稿に基づいて、1985年オランダの出版社から発行されたものである。

鈴木 (1988) によると、“ケイパビリティ”とは、「複数の生き方を実現できる自由度、生き方の幅」(p.25-27) のことであるとし、後藤 (1999) では、「潜在能力とは、ある資源とある消費能力のもとで達成可能な機能 (functionings) の集まり」であると定義されると言う。潜在能力という日本語は、どこまでセンのケイパビリティという概念装置をうまく表しているのだろうか、センのアイデアを伝えるのに成功しているのだろうか。

また、後藤 (1999) では、“ファンクショニング”とは「資源を利用することによって個人が獲得する行いや在りよう (doings, beings) の組み合わせ (ベクトル)」(p.27) と定義されるという。鈴木 (1999) では、「ひとの機能とは、財貨・資源を投入してひとが選択的に実現する生き方・在り方のことに他ならない」(p.24)。商品の特徴から、選び取って達成しようとするもので、人々の豊かさの源であるこのファンクショニングを、機械的な含意を持つ「機能」としてしまうと、エレベータの機能は人やモノを異なる階に上げたり下ろしたりすることであるように、人間の足の機能は身体をどこかに運ぶことである、ということになる。センによると、慢性的な貧困はケイパビリティの剥奪によるもので、飢饉 (大規模で急性の飢餓) とはエンタイトルメントの急激な崩壊によるのである、という<sup>1)</sup>。

エンタイトルメントは、絵所 (1997) によって、「権原」と訳されている。絵所 (1994) では、カタカナで“エンタイトルメント”で通ってきていた。センの定義により、それは「ある個人が支配することのできる一連の選択的な財の集まり」であり、「ある人が消費を選択することができる財の集まり」と定義される。センの意味での“エンタイトルメント”概念は、「権原」という極めて法律的含意の濃い、あらゆる権利の根源としての日本語が最も適

---

1) 峯 (1999) p.17.



切なのであろうか<sup>2)</sup>。

### 3. より良い理解のために

これまでの議論から、本稿で取り上げている3つの概念のより適切な日本語を考察する。

#### 3-1. “エンタイトルメント”は「基本的請求力」

ロバート・ノズィックはその正義論の基礎に、彼のいう「エンタイトルメント」を置く。自由至上主義の立場から主張するノズィックのいうエンタイトルメントとは、全ての人を持つもので、結果がどうであれ、他の諸権利の行使によって決して矮小化されるべきでない基本的な権利のことである。これこそまさに、「権原」という法律用語としての日本語に近い概念を表している。

センの言う“エンタイトルメント”とは、ノズィックのそれとは趣を異にして、商品ベクトルがそこから選択される、全ての可能な集合  $X_i$  のことである<sup>3)</sup>。センの“エンタイトルメント”の崩壊は、働く人の賃金率の急激な下落や、食糧を買わざるをえない人が直面する激しい食糧価格の上昇、伝統的農村社会の分断・マヒ・崩壊などによっても起こりうる。文章上の法律は存在していても、政府が機能マヒ・大混乱に陥って、輸入が完全に停止したり、救援活動の一連の繋がりがどこかで分断されたりすると、“エンタイトルメント”の失敗が起きる。これが、複合的に急激に、特定の地域でおきる

2) 狭義のエンタイトルメントは法制度と密接に関わるが、センの概念ではそれを含むはるかに広い様々のモノを指している。Devereux, 1993 (松井訳, 1999) を参照。

3) 山形辰史氏 (アジア経済研究所) は、ケイパビリティ、ファンクションニング、エンタイトルメント、という英語の、センの用語自体が適切な命名であろうかという疑問を出された後、エンタイトルメントには「入手可能性」のほうが明解ではないかと提言された。「入手可能性」としてしまうと、実は、様々な種類のエンタイトルメント (交換、労働や、遺産、家庭内、政府による分配・保障など) の全体を包括しきれなくなる欠点が生じる。

と、大規模な飢餓が発生し、飢饉になってしまったりする。その時の崩壊する“エンタイトルメント”の種類によって、飢餓・飢饉の犠牲者の地域、職業、階層、年齢層、性別、産業別セクターなどが特定される。飢餓・飢饉に対するエンタイトルメント・アプローチ、つまり、基本的請求力（金額で測った財・サービスへの支配力）の説明力、有効性を論じたのが、センの1981年の著作、*Poverty and Famine*、である。

### 3-2. “ファンクショニング”は「生命活動」

上の定義からも明らかのように、ファンクショニングとは、センはある個人がしたいこと、なりたいもの、それらの全ての集まりであるという。“Doings and Beings”，つまり、行きたいところへ行けること、栄養が十分であること、身体が健やかであること、自分のいるコミュニティーで尊敬されていること、恥じることなく外を歩き回れること、などである。このアプローチの利点の第1は、個人の状態・状況を純粹に商品からのみ見るのではなく、また純粹に心理的・精神的にのみ見るのでもないことである。

第2は、このアプローチでは、人が生を営む上で特定のやり方でうまく生きているかだけではなく、そのようなさまざまな活動・生の側面をやりとげる能力があるかどうかも見ることが出来る。後者に関しては、個人の選択の重要性はむしろ小さく、人間の生きる基本的な権利の側面と見ることもできる。

従って、センのファンクショニングとは、個々の人が生き、命の躍動を発揮する「生命活動」というべきものである。「機能 (Function)」とは、物の働き・作用、役割を果たすこと、組織・機関が活動しうる能力、などをあらわし、機械的な意味合いが強い。センのファンクショニングは、器官や組織、機械がいかなる働きをするか・持つかではなく、人々が現実に達成するさまざまなすること、なること、したいこと、なりたいこと、の集まりなのである。筆者は、センのファンクショニングに対しては、機械的な「機能」ではなく、人間的な「生命活動」をあてることが、センの意図にはるかに近いと

考える。センは、ファンクショニングで、人々の豊かさをみることを提案しているからである<sup>4)</sup>。

### 3-3. “ケイパビリティー” は「可能力」

センは、何故 Potential, Potentiality, Ability という言葉を使わなかったのだろうか？センの言う“ケイパビリティー”とは、人が価値を置く行為を行い、価値を認める状態に到達する能力からみた暮らしや便益なのである。これは、上の第2節でみたように、 $F_i$  の総体のことであり、現実可能な活用関数のすべて、ファンクショニング（生命活動）をそこから選択してくる全体を集めたものである。言いかえると、人がそこから選んで、達成するさまざまなファンクショニング（生命活動）の集合、これを  $Q_i$ : ケイパビリティー、と呼んでいる。これは、明らかに「潜在能力」という日本語が意味するものとは異なる。個人が様々な生命活動を“可能にする力”そのものがケイパビリティーなのである<sup>5)</sup>。

「潜在能力」と「ケイパビリティー」の違いは極めて大きい。まず第1に、前者は、人が持つと考えられるが、顕在化するかどうか、顕在化させられるかどうか、使われるかどうか分からない能力。せいぜい、そういうことは問題にしない、概念なのである。実は、持っているかどうかさえも分からない力、である。後者は、全ての個人が、1人1人が本来備え持っている力・能力であり、その人が生を生きる上で有用であり、生を享受する力なのである。

第2に、前者は人々の間で同じか異なるか、それは分からないが、後者は

4) 山形氏は、ファンクショニングは「生命活動」のみに限られるのかという疑問を提示された。筆者は、「生命活動」を広く解釈することによって、十分有用に使えると考える。

5) 佐藤仁氏（東京大学）は、セン自身がケイパビリティーを使う前には“basic power”という言葉を使っていた時期もあるように、それほど固定的な概念ではないのかもしれないという。センのアイデアの基本部分の1つは、選ばれなかった選択肢にも十分な価値を見つけるということであるならば、「可能力」はまさに適切なのではないだろうか。

違って当然とする。同じである必要も理由もない。第3に、前者は身体的・物理的・知的・芸術上などの才能・タレントとして現れるのに対して、後者は人々の生の基本的側面に注目する。その上で、さまざまなものを考える。したがって、第4に、前者はどちらかというとな否定的、部分的意味合いがあるのに対し、後者は極めて積極的・前向きな側面があり、そして個人としての一人の人間を総体的に捉える。センのいう、“ケイパビリティ”は、人々が、経済的（給料、親など）、政治的（法や制度）、社会的（歴史、宗教、文化、教育など）の与えられた条件の下で、それぞれの個人がそもそも兼ね備えている生きる力なのである。したがって、“ケイパビリティ”は、日本語では「可能力」と呼びたい。センはこれの欠如が貧困をもたらし、貧困そのもの（所得貧困ではなく）であるという。

要するに、センの言うこの“ケイパビリティ・アプローチ”とは、ある人の生活（生きていること）の便益、損得、利点、強みを評価するに際しては、生活の一部として、さまざまな価値ある生命活動（ファンクショニング）を達成・実現するその人の実際の能力で測る、という考え方のことなのである。“ケイパビリティ”を「潜在能力」という日本語をあてることは、(1) 静態的意味を与え、(2) そのものが何であるかを認知しない、(3) 使われるのかどうか、発揮されるのかどうか、役に立つのかを問わない、(4) 発揮されない、使われない能力があるとしたら、それは何故なのか、誰のせいなのか、どういう制約があるのか、を問わない、といった弱点から逃れられない。この意味からも、筆者は「可能力」を提唱する。

#### 4. 要約と結論

本稿は、“ケイパビリティ”を「可能力」（潜在能力ではなく），“ファンクショニング”を「生命活動」（機能ではなく），“エンタイトルメント”を「基本的請求力」（権原ではなく）と、それぞれ呼ぶことを提唱する<sup>6)</sup>。センによると、ケイパビリティの欠如こそが貧困の真の原因（所得貧困はその一部でしかない）であるという。ファンクショニングの低下・少

なさが、豊かさ (Well-being) を阻害するのである。エンタイトルメントの失敗・崩壊が、飢餓・飢饉の真の原因であり、それらを防ぐような社会 (経済, 政治) の仕組みを作り、立て直すことが、人々の飢え, 大規模・急激な飢饉を起こさせないことにつながるという。

センの開発とは、「自由の拡大」であり、選択肢の範囲の増大, 貧困, 不平等, 飢餓・飢饉のない社会, あるいは, それらが起きようとするとき, 迅速に, 有効な対策の講じられる社会に向かうプロセス, である<sup>7)</sup>。その中では, 人々は最大限の請求力を使い, さまざまな生命活動を楽しみ, 元来持っている可能力を, 自由に発揮している, そういうプロセスを「開発」という。このような「開発」の過程をイメージするセンの開発経済学の枠組みの中では, もちろん, 社会的選択の理論に基づき, 「可能力」, 「生命活動」, および「基本的請求力」の概念は極めて自然なものとして理解されよう。

---

6) 野上裕生氏 (アジア経済研究所) は, この問題に関しては, 2つの大きなギャップがあることを指摘された。1つは, センと日本の学界との間の隔たりであり, 第2は日本の学者と日本人一般とのギャップである。これら両方ともかなり重要な大きな溝ではないかとの指摘である。筆者の問題意識もまさにその点にある。

7) 松岡俊二氏 (広島大学) の指摘は, 人間開発に関する言葉・思想の力には極めて大きいものがあるが, この議論は現実の開発プロセスにとってはいかなる意義があるのか質問された。筆者は, 例えば, 飢饉の分析・理解・救援活動に対して, 正確な定義とより厳密な分析用具“エンタイトルメント”の崩壊, がきわめて重要であるとお答えした。また, 坂井秀吉氏 (広島市立大学) からの私的な交信で, センの自由の概念は重要であるが, 現実の開発プロセスの中でどう実現するのかのほうは現実的にはより重大なのではないかと指摘された。センの思想体系・分析姿勢は, 経済の市場の働きは十分に承知した上で, マクロ経済・国民経済として一括みにすることを拒絶し, 個人一人一人に焦点をあてる。しかし, 完全に個人単位で何も言えなくなるのではなく, 特定の職業集団, 階層, 性別, 年齢別, 地域別に誰が得をし誰が損をするのか, その対策はどうすべきなのか, 明確に分析できるような概念を創り出していることは強調されねばならない。

参考文献

[邦文文献]

- セン (1981) (黒崎・山崎訳)『貧困と飢饉』岩波書店, 2000
- (1982) (大庭・川本抄訳)『合理的な愚か者——経済学=倫理的探求』勁草書房, 1989
- (1985) (鈴村訳)『福祉の経済学——財と潜在能力』岩波書店, 1988
- (1990) (川本訳)「社会的コミットメントとしての個人の自由」『みすず』358号, 1991年1月号
- (1992) (池本・野上・佐藤訳)『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店, 1999
- (1997) (鈴村・須賀訳)『不平等の経済学』東洋経済新報社, 2000
- (1999) (石塚訳)『自由と経済開発』日本経済新聞社, 2000
- (2002) (大石訳)『貧困の克服——アジア発展の鍵は何か』集英社
- デブロー (1993) (松井訳)『飢饉の理論』東洋経済新報社, 1999
- 絵所秀紀 (1991)『開発経済学——形成と展開』法政大学出版局
- (1994)『開発と援助——南アジア, 構造調整・貧困』同文館
- (1997)『開発の政治経済学』日本評論社
- 後藤玲子 (1999)「社会保障とセンの潜在能力理論」『経済セミナー』1999. 3月号, pp.25-30
- 鈴村興太郎 (1998)「機能, 福祉・潜在能力——センの規範的経済学の基礎概念」『経済研究』第49巻第3号, 1998年7月号, pp.193-203
- 鈴村興太郎・後藤玲子 (2001)『アマルティア・セン——経済学と倫理学』実教出版
- 峯陽一 (1999)「開発研究にセンが, 持ち垂らしたもの」『経済セミナー』1999. 3月号 99. 15-19,
- (2000)『現代アフリカと開発経済学——市場経済の荒波の中で』日本評論社

[英文文献]

- Devereux (1993), *Theories of Famine*, Harvester Wheatsheaf: London.
- Dreze & Sen (1989), *Hunger and Public Action*, Clarendon Press: Oxford.
- Dreze, Sen, & Hussain (eds.) (1995), *The Political Economy of Hunger*, Clarendon Press: Oxford.
- Nussbaum & Sen (eds.) (1993), *The Quality of Life*, Clarendon Press: Oxford.
- Nussbaum & Glover (eds.) (1995), *Women, Culture and Development: A Study of Human Capabilities*, Clarendon Press: Oxford.
- Sen (1970), *Collective Choice and Social Welfare*, Holden-Day: San Francisco.
- (1973) (1997), *On Economic Inequality*, Clarendon Press: Oxford.
- (1981), *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Clarendon Press: Oxford.
- (1982), *Choice, Welfare and Measurement*, The MIT Press: Cambridge, MA.
- (1984), *Resources, Values and Development*, Harvard University Press: Cambridge, MA.
- (1985), *Commodities and Capabilities*, North-Holland: Amsterdam.
- (1987), *On Ethics and Economics*, Basil Blackwell: Oxford.
- (1987), *The Standard of Living*, Cambridge University Press: Cambridge.
- (1992), *Inequality Reexamined*, Russell Sage Foundation: New York, & Clarendon Press: Oxford.
- (1999), *Development as Freedom*, Anchor Books: New York.
- & Dreze (1999), *The Amartya Sen and Jean Dreze Omnibus*, Oxford University Press: New Delhi.
- & Williams (eds.) (1982), *Utilitarianism and Beyond*, Cambridge University Press: Cambridge.
- Tinker (ed.) (1990), *Persistent Inequalities: Women and World Development*, Oxford University Press: New York.